

三重大学人文学部伊勢湾熊野地域研究センター、創造開発研究センター、
附属図書館研究開発室、海女研究会 共催

《講演会の御案内》

日時：7月18日（金） 16時20分～17時50分

場所：三重大学人文学部 第2講義室（専門棟1階）

講演：石原義剛「志摩の海女と濟州島の海女 海女を世界遺産に！ - 」

[講演要旨]

女性の素潜りによる漁は、世界中で韓国の濟州島と日本でのみ行われてきました。朝鮮半島南端の離島・濟州島は、古くは流刑の地で、中央政府から厳しい支配を受けた歴史を持ちますが、ここには現在1万人ほどの海女が居ます。一方日本では全国で2000人ほどの海女のうち半分以上は志摩地方で活動しています。志摩の海女は、伊勢神宮への熨斗鮑の献上や「しろんご祭り」など、独特の民俗を保持していることでも知られています。

近年韓国では、世界的にも貴重な濟州島の海女を無形の文化財と評価し、志摩の海女と合わせて世界遺産に登録しようという動きがあります。

志摩の海女と濟州島の海女とは、古くから交流がありました。8世紀半ば、志摩国英虞郡から「耽羅鰓」（たんらあわび）六斤を「調」として貢納したことを示す木簡が、平城京跡から出土しています。この「耽羅」とは濟州島の古名であり、古代から志摩との間に何らかのつながりがあったことを思わせます。19世紀末頃からは志摩の海女が朝鮮半島へ、濟州島の海女たちは志摩を始めとする日本の海岸各地へと盛んに出稼ぎに行きました。国境を越えた二つの地域で活動した海女の交流の歴史を振り返り、両地の海女の共通点と相異点、そして海女文化の持つ意味について考えます。

現役の海女さんにも、お話しをして頂く予定です（漁次第で中止の可能性あり）。

[石原義剛氏の略歴]

1937年生まれ。早稲田大学第一文学部卒。9年間の放送会社勤務の後、東海水産科学協会常務理事、同協会が運営する「海の博物館」館長を務め、現在に至る。

近代漁業史、漁村民俗、海の汚染史を主な専門領域に、人間と海との関わり方を総合的に研究する。伊勢湾沿岸の漁民の生業や暮らし、生活文化については他の追随を許さない。海の環境保全運動（「Save Our Sea運動」）での貢献も大きく、平成12年度の三重県環境功労賞を受賞。博物館の運営についても種々の提言を行い、博物館友の会の組織化、体験教室の開催など市民向けの啓蒙活動に熱心に取り組み、博物館のカリスマ的存在である。熊野古道の世界遺産登録を記念して建設された「県立熊野古道センター」の構想取りまとめの中心となり、現在もセンター長代行として運営に携わる。

2005年から三重大学客員教授。尾鷲市須賀利町の総合調査プロジェクトなどを主催する。

一般来聴歓迎！！